

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～論語！！『巧言令色、鮮なし仁』～

2500年前、春秋戦国時代の末期、魯国の母子家庭に生まれた孔子は、勉学に励み（刻苦勉励（こっくべんれい））して牧場の下級役人から昇進し、51歳で司法長官に就任しました。しかし、国内の政争に敗れ、かつ政権のトップ層が遊興にふけっているのを見て、魯国を見限り、諸国で遊説を重ね、魯国に帰国後は古典の整理に費やすとともに門弟の教育に身を捧げました。

孔子の人生は、辛酸を嘗め尽くした人生であり、天命を悟った人生でもありました。その孔子の教えを弟子たちが残したのが・・・「論語」です。

・・・「論語」を読み始めて驚いたのは、僅か五百余の短文節集の「論語」の中に次の文節が二度も出てくることでした。

「子曰わく、巧言令色、鮮なし仁」

孔子の特別な思いが込められている言葉に違いありませんが、どの解説書を開いても概ね・・・
「爽やかで色よい言葉、弁舌、また人をそらさぬ対応、顔つき、そんな人間ほど仁とは遠い」という説明しかありません。

私は、「すくなし」に「少」ではなく「鮮」の漢字が当てられていることに深い意味があり、滅多にないハッキリとした少なさをしめしているのではないかと浅慮（せんりよ）を巡らせてきました。

孔子は長い人生の中で、他人の巧言令色に幾度も煮え湯を飲まされてきたでしょう。

他者からの巧言令色を見極められず、騙されるのは愚かであり、とても仁者とはいえない

と、自身にも門弟にも強く訴えていたのではないかと思います。

最近、世界中で横行する詐欺は巧言令色そのものであり、騙す者には「仁」はありません。

弱者への配慮は当然ですが、自助よりも公助を安易に強調する今の政治家も巧言令色にみえます。

巧言令色に相対する術は、個々が自主独立、独立自尊の精神を実践することであり、それこそまさしく「仁」といえましょう。

孔子は、人の基本は「仁」だと教えています。

仁なき人、社会、国は衰え、斜陽化します。

仁を取り戻し、復活を遂げることを私は願って止みません。

『致知』2020年1月号「巻頭の言葉」JFEホールディングス名誉顧問 数土 文夫（すど ふみお）



よくこの通心（信）で紹介しているドラッカーも、
「これからは、目的の実現のために、自ら考え、決定し、行動する能力がこれから問われていくことになるでしょう。自ら時間を管理し、何に集中するかを判断します。」

「このような環境下では、他者が管理・監督をしなければ、動けない者の衰退は明白です。これは、新しいことではありません。より一層、基本と原則に忠実であることです。」と言っていましたね。

私たちが実践できる基本と原則って何でしょう。考えてみませんか？

期末考査に入るので通心（信）はお休みします。次は、終業式前（「冬休みを有意義に過ごすために」）で。